第170回 平成16年８月

森 信三先生の遺されたもの

臂（ひじ） 繁二（発表時62歳）

1 奇特な運命の生い立ち

森信三先生は愛知県知多郡阿久比字植大に端山（はしやま）家の３男として生まれる。父方は代々新美（にいみ）姓で紺屋を家業としたが、明治維新に平民にも姓がつけられるようになって、何故か端山（はしやま）姓になった。祖父は端山忠左衛門。戸長、郡長、さらに第１回の国会議員に。ついで 16 年も県会議長を歴任。多くの人々から永くその遺徳を偲ばれた名士だった。

実父の放蕩から数え年２才で実母は生家へ戻り、三歳で森家へ養子に出される。その間、複数の女性からお乳をもらって育つ。森家は縁もゆかりもない一介の水呑百姓であった。森種吉・はる夫妻は二人して律儀、勤勉、しかも働き者で評判だった。信三は 20 才で師範学校を卒業まで実母に逢うことがなかった。

実家（端山家）の叔母（父の姉）にあたる日比（ひび）さい女は、夫だった第１回の奏任（そうにん）校長である日比恪（ひびいつき）とともに深く信三を愛してくれた。さい女は後日祖父忠左衛門の小伝を書いた才女で、よく信三に祖父の話をしてくれた。信三にとっては祖父の教えの伝承者となった。そして祖父もまた養子であった。

実父は「不肖の子」であって、祖父没後わずか 10 年にして、遺産をすべて失う。

養家の森氏は「ほんとうの子だったら、とてもあんな大事にはできない」と評判が立つほど、まるで「落胤（らくいん）」でもあるかに信三を育てた。信三は大変出来が良かった。「何しろ端山さんのお子さんだものな」とよく聴かされて育った。校長、日比恪はなかなか良くできた人であって、岡田虎二郎先生を尊敬して静坐の研究会を開いたり、半田仏教会を興した。

数えの 13 才の正月、養父に連れられ祖父家へ年賀の挨拶に行ったとき、頼山陽の「立志之詩」を示され、意味が分からないどころか読むことも出来ない自分がいた。口惜しさと恥じらいはずっと後年まで尾を引いた。信三は３人兄弟であったが、二番目は生まれるとすぐ病気で他界、三つ上の兄は、岡崎中学校５年生 19 歳時に病没した。信三は 17 才でたった独りになった。そのとき日記の表紙裏に「誓って亡兄の分と二人前の仕事をしよう」と書いた。

高等小学校２年次、ある時日比恪氏に「自分も高等２年（現在の小６）がすんだら、中学へゆくつもりだ」と言ったところ「お前の家は中学へ行けるような家ではないから、高等小学校へ行って、そこを終えたら師範学校へ行き、学校の先生になる他ないから、今からその

つもりでいるがよい」と言われた。当時師範学校は授業料が要らなかった。この一言は信三にとって、人生において味わった最初の深刻な挫折感であって、後年辿った人生の歩みは、結局はこのとき味わった人生の寂寥感の延長ないしは展開であった。信三は高等小学校を卒業後、師範に入るまで1年半を日比校長の小学校で仕丁(しちょう)を勤めた。以後名古屋師範、広島講師、京都大学などの学費は遠い親戚や匿名の篤志家に支えられたのであった。

2　天王寺師範での教育と転機

京都大学では大学院を含め8年間も在籍。首席で卒業したがなぜか天王寺師範の講師に就職。広島高師の恩師**西晋一郎**先生は信三が「講師」で甘んじていることを心配し学位論文を出すようにすすめた。だが森信三先生は論文として一気に「恩の形而上学(けいじじょうがく)」を書き上げた。ところが学位論文とは学問の証であって、博引旁証(はくいんぼうしょう)を綿密にしなければならないという指摘を受け、自分には学位など縁なきものと断念する。

このとき森信三先生は自分の進むべき道を明確に見定められたと思う。

進むべき道、それは学問のための学問ではなく、地位も名誉も超えて**生涯を国民教育に捧げる道**であった。それからも森信三先生は読書に没頭され、その思索の成果を心血を賭して天王寺師範での授業に打ち込まれる。その授業の記録が昭和 12 年に刊行された名著**「修身教授録」**だ。

3　満州から生還そして「銘」を立てる

昭和 13 年、森信三先生は中国大陸に渡り、満州の中堅指導者を養成する目的で設立された建国大学の教授に赴任された。天王寺師範時代と同じく渾身の力で「哲学概論」や「精神講話」「東洋哲学」を講じられ、また塾頭を兼ねて学生と起居を共にして懸命な指導にあたられた。しかし日本の敗戦となり、九死に一生得て祖国の土を踏むことができたのは、昭和 21 年6月のことだった。衰弱した体の回復を待つ間、森信三先生は来し方を省み、混乱した日本の将来を見つめ、「銘」をしたためます。

「学者にあらず／宗教家にあらず／はたまた／教育者にもあらず／ただ宿縁に導かれて／国民教育者の友として／この世の「生」を終えむ」

これは森信三先生の人生を貫く**心願**になった。

4　従容として

戦後浪人となられた森信三先生は、各地の教え子から講演に招かれました。一切の背景をもたない一個人として、森信三先生はどんな山間僻地にも出向きます。その延長として、雑誌「開顕(かいけん)」を発行されます。それが森信三先生の戦後の出発となりました。その**「志」**は昭和 13 年に月刊誌『実践人』の創刊となって、たゆみなく現在も持続されています。

「自分の専門は生き方の探求。学問はその媒介にすぎない」と先生はつねづね語られましたが、旺盛な講演活動のかたわら、先生の思索と実践は学問的結晶となって、次々と著作となります。その到達点が『**全一学**(ぜんいつがく)』でした。

最期まで思索と実践から掴み取った真理を伝えようとする営みをやめられなかった先生

は平成4年11月21日永眠。享年97でした。

5 森 信三先生の遺されたもの

森信三先生の生涯はその全人間的な力と市井の哲人との出逢いと交流によって豊穣に彩られています。先生の教えに覚醒した人々が、いまも「実践人」として同じ志に結ばれ研鑽を続けているのがその証です。

「全集25巻と続全集8巻」

森先生の古稀記念として、全集25巻が昭和43年に完結しますが、何と齢86歳にして「続全集」刊行のスタートが切られます。

先生のほとんどの著作が自費出版であって、この**「全集25巻と続全集8巻」**も全国の道友の支援によって刊行されます。

先生こそは**「現代に生きる野の哲人」**と言うべく、正に現代の正師に値する方であります。それもそのはず先生が歩まれた数奇で辛酸痛苦に満ちたご生涯が先生を錬磨したのです。**「人生二度なし」**を根本信条として真摯に生き抜かれた**生き方とその全生涯**は余人の全く及ばない處です。

6 森信三先生の人と思想

(1)「生き方宗」の宗祖

まずは壮絶な求道者と言えます。86歳時ですら独居自炊であり、しかも仙人食ともいうべき簡素極まりない食事をされ、85歳時の大患いの後半身付随になっても、なお執筆を続けられた壮烈さでした。全集8巻の補訂の一方、哲学的エッセーの構想を育みつつ、著述をさし控えてまでも、手紙や**ハガキ**の返事は最優先でした。また全国同志からの書信や刷りものにくまなく眼を通され、マヒの指先でもって、ハガキで感想の返事に没頭せられました。**「米粒一つ作らず、レンガ一つ焼かぬ人間はせめてこれくらいのことは…」**と言われたのです。

(2) 求道の源流

先生の求道の源流は23歳の広島高師時代に古本屋で発見せられた、隠者新井奥邃の箴言です。その後いかに先生が生涯かけて新井奥邃先生を憧憬し続けられたか、次の一首で伺い知ることができます。

＜一人の隠者の心幽けくも追い求めてぞ一世過ぎしか＞

その新井奥邃先生の名文は以下のごとくです。(「ダンテの神曲」前文山川丙三郎訳)

「隠路あり。照々の天に宏遠の道よりして開く。……クライストの　微妙の戸なり。一息開けて億 兆相抱くべし。一息閉じて衆 星隕越を致さん。生命の機は一息に在るなり。意なり。(165頁)

また先生は透徹した**明眼者**でした。その具体的一例として、流浪の俳人山頭火を、芭蕉に迫る俳人として**山頭火**の「草木塔」の序文の中で認められていますし、江戸中期の高僧**慈雲尊者**を鎌倉期の日本仏教の祖**道元、親鸞**と並び称すべきお人と位づけられました。

近くは短歌をやっておられた仏教国民詩人の**坂村眞民**氏に詩作を勧めたれたのは有名です。

また教育界では、京都の**芦田恵之助**先生との邂逅、熊本の**徳永康起**・但馬の**東井義雄**先生など、教育界の巨星としてその偉才を認め、支援交流なさいました。

(3)着手点の明示【身心相即道】

また、民族の将来に対する大局的考察だけでなく、全国の同志道友には常に明快な方向と活動の打開策を親身になってその一歩の着手点を独りひとりに示されました。その実践的叡知の中、特筆すべきものは

①**「子供のしつけ３ヵ条」** (1) **朝のあいさつをする子に**

(2) **「はい！」とハッキリ返事のできる子に**

(3) **席を立ったら必ず椅子を入れ、履き物を揃える子に**

②**「立腰」のこと**

立腰こそは性根の入った人間にする極秘伝だ。

「常に腰骨をシャンと立てること　これ人間に性根の入る極秘伝なり」

【立腰の仕方】

お尻を思い切り後ろに引く。

それとは逆に腰骨を思い切り前に突き出す。

ひざとひざは、男子はこぶし二つ分、女子はひざとひざの間をあけない。

肩の力をぬき、ややアゴを引く。下腹に力を入れる。

③ハガキ道

５分の時間があれば、ハガキが書ける習慣を、一日三枚

「たった一枚のハガキで、しかもたった一言の言葉で、人を慰めたり励ましたり出来るとしたら、世にこれほど意義のあることは少ないであろう」

④職場再建の三原理　**「時を守り　場を清め　礼を正す」**

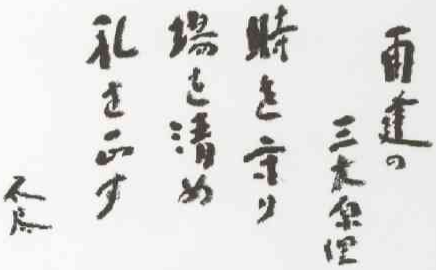
⑤食と健康

「玄米食は我々日本人には食の原点である」

「飯菜交互完全咀嚼法」

「無枕安眠法」

「半身入浴法」



森信三先生遺墨

7【語録抄】

○私たち一人ひとりはある別々の使命を背負って神からこの世に派遣された。

○真理は現実の唯中にあり。

○夫婦の仲というものは、良きにつけ悪しきにつけお互いに『業』を果たすために結ばれたと言えよう。そしてこの点に腰がすわるまでは、夫婦間の動揺は止まぬと見てよい。

○教育とは人生の生き方のタネ蒔きをすることなり。

○教育は流水に文字を書くような果ないわざである。だがそれを巌壁に刻むような真剣さで取り組まねばならぬ。

《参考文献》「森信三全集・続全集」「実践人」「端山忠左衛門伝記」

（いずれも「実践人の家」刊）